

教育新報

新大教育学部同窓会
第 164 号

発行人 佐藤重勝
事務局 新潟大学
教育学部内
TEL(025)263-6760
印刷所 (株) 文久堂



同窓会の仲間

教育学部同窓会副会長 湯本 正明

教育学部に入学した方々は、恐らく子どもが好きで、子どもたちの人格形成に深く関われる教師という職業に大きな価値を見いだしている方がほとんどだと思います。そして、大学の課程を終え、いざ子どもの待つ現場へと情熱を燃やしていると思います。

A教諭は、難関の教員採用選考検査を一回で突破し、希望に胸を膨らませて教壇に立ちました。ところが、いざ子どもたちの前に立つと、思うように話ができません。授業が思うように成立しません。子どもたちとの人間関係を思うように構築することができません。結局様々な理由で、採用後間もなく教壇を去ってしまいました。

何故でしょう。間違いなく優秀な人材だったと思います。教育への志も高かったでしょう。着々と目指す道を歩んできたはずですが、それなのにどうし

て・・・残念でなりません。

B教諭は、教師になりたいという熱い思いを持ち続け、一年間の臨時職員勤めの後、選考検査を突破して念願の教壇に立ちました。素晴らしい先輩に出会い、その指導力に憧れました。自分が理想とする教師像を描き、子どもたちと共に悪戦苦闘してきました。そして三年が経ち、子どもたちの卒業と同時に、自らも新たな子どもたちの待つ新天地に向かおうとしています。

B教諭は誠実で、しかも研修意欲旺盛です。子どもたちのためになるのならばと、何にでも自らチャレンジします。その姿は年を追う毎に頼もしく見えてきました。ですが、決して平らかな道だけではなかったはずです。学習指導に悩み、学級経営に苦しみ、不登校児童の対応に汗を流していました。

A教諭とB教諭の違いは何だったの

でしょう。一言で個性の違いと言ってしまうとそれまでですが、それでは解決の糸口は見えません。

「教師に向いていたかどうか」の違いでしょうか。ですが、最初から教師に向いている方がどれほどおられるでしょう。経験を積み、研鑽を重ね、辛酸を乗り越える中で、教師としての適性が磨かれるのだと思います。

では、「心」の持ちようでしょうか。誰もが最初は戸惑います。経験もなく教育技術も未熟なので当然とも言えます。その戸惑いを乗り越える「心の強さ」があったかどうかです。しかしこれは、一人で克服するのはとても難しいことです。誰かの支えがどうしても必要です。

私たち新潟大学教育学部同窓会の会員は、広く県内各地で活躍しています。私たちの目の前には、教師としての力を高めようと踏ん張っている後輩がたくさんいるはずです。

その後輩たちの元気が出るように、声を掛けてください。

「どうだい。元気にしてるかい。」

「私はよく、ここですますいたよ。」
何気ない先輩の一言で勇気づけられる後輩、先輩の熱意に触れて、自らを奮い立たせる先輩、そんな同窓会の仲間でありたいものです。



花鳥風月

九月中旬、二十八期の同期生と佐渡旅行をした。佐渡生まれで修学旅行引率として何度も訪れた地であるが、今回の旅行は知られざる佐渡の一面・佐渡の良さを発見し、これまでの佐渡に対する認識を一新するものとなった。

一日目は、金北山の北、大佐渡の山中にある石名天然杉を地元のガイドさんの案内で散策した。象牙杉、家族杉など強風と霧にもまれて育った巨木・奇木は見る者を圧倒した。遊歩道が開発されて二年目、コース全長八百メートル、標高差百メートル、約一時間弱の見学と山頂からの眺望で大満足の散策となった。

二日目に訪れた自性院長谷寺（大和にあるのは長谷寺）は、今から千二百年前、弘法大師によって建てられたという記録がある。本尊の十一面観音立像三体は弘法大師の作と伝えられ、明治三十九年四月国宝（現国重文）に指定されている。古来から秘仏として三十三年毎にしか御開帳されないという。住職の小気味い法話といい、境内にある多宝塔・五智堂（県有形文化財）など沢山ある宝物などの見学で、時の経つのを忘れてしまいそうになった。

金山や朱鷺もいいが、「灯台もと暗し」まだまだ知らない観光地や歴史の宝庫佐渡の良さがあると実感した。今度は、是非とも佐渡国八十八箇所巡りを実施してみたいものである。

広報部長 白杵 勇人

新潟大学教育学部同窓会

第三十九回同窓生の集い

研修部長 加藤 文子

今年の「教育学部同窓生の集い」は、九月二十九日（土）に、新潟会館にて、「これからの学校と地域社会」と題し、本大学大学院の雲尾周准教授から講演をいただきました。今回は、同窓会創立六十周年記念の年となりましたので、過去の資料を入れたパンフレットも作成し参加者に配布いたしました。佐藤重勝同窓会長から、「記念すべき年に記念すべき行事とも考えたが、派手で



挨拶する佐藤重勝会長

はなくとも上質な会にしたい。」というあいさつがありました。まさに上質な会となった様子をご報告いたします。講師の雲尾先生は六日町のご出身で、平成十六年に当大学に着任されました。教育行政・生涯学習・学校経営などの分野で、地域と結びついた調査研究・実践を行われているほか、県下各校・園での講演会、学校組織マネジメント研修会講師など幅広く貢献されておられる方です。

「今日は何の日か」の問いに始まり、教育動向の鋭い分析、これからの日本に必要な人材と政策の関係、地域の中で果たす学校の役割、学校を支えるものとしての地域、生涯学習社会について熱く語っていただきました。

東日本大震災以後、地域防災拠点としての学校の役割が大きく取り上げられています。教訓は、実際の地域防災訓練に生かされてきていて、小・中学校も入って行う地域防災訓練の例、小・中連携の引き渡し訓練の例など具体例をいくつもお話いただきました。非常



講師の雲尾周准教授

時の連携のために常時から備蓄の共同化を進めておくことの大切さも説かれました。

生涯学習の基盤を作る場、そして、活用する場としての学校という視点は多くの示唆を与えてくださいました。世界に羽ばたくとき、自分の根っことなる学校や地域のことを好意的に話せることが大事であり、学校教育の目標は、学校での学びと悪い出を基に活躍する子を育てること、地域の教育の目標は、この地域で育まれたことに愛着と誇りをもつことではないかと締めくくられました。

懇親会には三十七名の方がご参加くださいました。中川幸次顧問から、同窓会が集めたお金で良寛の銅像を建立

したというお話があり、印象的でした。会の始めに新潟大学学生歌を歌おうということになりました。「忘れていて歌えないのではないか」という心配など吹き飛ばすほど朗々とした歌声が響き渡り、青春の一コマを思い出された方も多かったのではないのでしょうか。

アトラクションは、学生サークルによる演奏と、首都圏在住の同窓生で演歌歌手の舞さくらさんの歌披露で、大変盛り上がりしました。

同窓会の集いでありながら、集う仲間が少ないというのは、担当としてはさみしいものがあります。今後は同窓会の集いそのものの価値を高めながら、広くお知らせする方法等を一層考えていく必要があるかと思うところです。



会員の広場

場数を踏む



聖籠町立聖籠中学校
栗原茉莉子

「場数を踏む」多くの経験をつむ。
場なれる。(引用…広辞苑)

子どものころから音楽が好きで、器楽クラブや吹奏楽部で楽器を演奏する楽しさを覚えた。大人になった今もその気持ちは変わらず、舞台上立って表現することは大きな喜びである。おかげさまで、学生時代から数々の舞台に立たせてもらった。「心臓に毛が生えている」と言われることも少なくない。日々の授業も、ある意味では舞台の一つと捉えることができる。ホールの客席とは違い、生徒は至近距離にいるつたない授業にも目を輝かせてくれると嬉しかった。だんだんと慣れてきたころ、ふと考えたことがある。慣れとダレは紙一重なのではないか。

教員の世界に入って四年目。正直なところ、まだまだ学ぶことがたくさんある。これから多くの経験を積み、いい意味で慣れていくよう努めたい。

「親」の思い



見附市立名木野小学校
反町 明子

教員となつて十二年が経とうとしています。現在、産休をいただき、第三子の出産を控えている身です。おなかの中で所狭しと動き回る我が子の誕生を、上の子たちとともに楽しみにしている日々です。

自分も親となり、子をもつ「親の思い」を少しは感じることができるようになったように思います。

昨年度、担任として初めて卒業生を送り出しました。十二年間という長い間、子どもを育てる親としての喜び・不安・悩み：様々な保護者の思いを担任として感じ、私も保護者とともに悩みもしました。だからこそ、「子ども自身にとつてはもちろん、保護者にとつても最高の卒業式にしたい！」という思いが自然と強くなりました。

産休に引き続き、しばらく育児をいただく予定です。自分が「親」として感じることで、学校に期待することを考え直し、育児が明けた時には、それを生かして仕事ができたいと思います。

そして：我が子と少しのんびりした時間を過ごさせていたきたいと思う今日このごろです。

好きです湯沢！



湯沢町立湯沢小学校
佐藤 静子

私たち湯沢小学校の生活科・総合的な学習では、湯沢町のよさや楽しさなどを住んでいる人だけでなく観光などで町に来られる方にも知ってもらいたいと考えて学習をしています。その名も「好きです湯沢学習」。三年生は湯沢の仕事お手伝い隊として、商店、食堂、役場、ホテルなどにお手伝いに行き、仕事をする人々とかかわります。

四年生は湯沢の自然について調べます。山や川に出かけてたくさん体験し、この自然を守っていくにはどうしたらよいか考えます。五年生は湯沢町の福祉について学びます。バリアフリーや福祉施設などについて調べたり、お年寄りと交流したりしています。六年生は過去・現在の湯沢を調べ、そこから未来を考えます。未来の湯沢をどのようにしていきたいか、自分たちで考えていきます。

このような学習を通して、湯沢小学校の子どもたちが「湯沢っていいな。湯沢が好きだな。」と思ってくれればいいなあと考えています。私たち職員も皆、「好きです湯沢」です。

通勤を考える



新潟市立味方小学校
橋本 直子

何年も前から恐れていたことが現実になりました。そう、C地域への転任です。転任早々に天候が悪く渋滞になり遅刻…。次の日からは、毎日高速を使って通勤するようになりました。

運転技術が未熟な私。高速道路を走っていると考えるだけでどきどき緊張し、下を見下ろす景色にも怖さを感じる日々が続きました。

ところが、人間慣れるものです。渋滞に巻き込まれることなく、眼前に大きく広がる空の色、季節の移ろい、そして見下ろす景色にも爽快感を感じるようになってきました。もちろん私は安全運転をしています。もちろん私は安全運転をしています。一人きりの時間を楽しんでいるようです。職場でも家庭でも忙しい日々ですが、通勤時間をわずらわしいもつたない時間と考えず、オンとオフを切り替える癒しの時間と考えています。

人生、楽しく考えなくちゃ。

さて、いまは雪の日々。どうしたら楽しく考えられるでしょう…。

皆様、通勤に気をつけて元気にお仕事しましょう。

学校紹介
①

地域に支えられ、地域と共に歩む
学校づくり

新潟市立西内野小学校

当校は、昭和五十四年に内野小学校から分離、独立して今年三十五年目を迎えます。

校区は新興住宅地でありながら、旧内野町のよき土地柄を受け継ぎ、学校を支え、応援しようとする伝統が根付いています。

西内野小の特色は何ですかと問われれば、異年齢集団による「縦割り班活動」とのべ三千名の学校支援ボランティアが学校を支える「地域と学校パートナーシップ事業」と即座に答えることができます。

この二つの特色を生かして、「西内野小ならではの教育」を実現させようと努めています。それが「地域に支えられ、地域と共に歩む学校づくり」という標題になります。

そして、異年齢の子どもとの関わり、保護者や地域の方々との関わりといった多様な人と人との交流を促すことで、教育目標「心豊かに 学び合う」が実現できると考えています。その様子を二つの特色からふれます。

まず縦割り班活動は、五百人規模の学校としては仕組みが定着し、毎日の



清掃をはじめ様々な教育活動の場面で機能しています。四月と十一月の顔合わせ交流会をかわきりに、六月の花いっぱい活動、九月の海岸遠足と続き、二月の六年生を送る会まで活動が続きます。

その中でも中心となる活動は、海岸遠足です。初秋の一日を終日縦割り班で過ごすことになります。六年生のリーダーを中心に、上級生は下級生を親身になってお世話します。そして、下級生は上級生の言い分けを守り、班活動で迷惑を掛けずに、協力しようと一生懸命です。帰り道では、疲れ果てた低学年のために荷物を持ってやったり手を引いてやったりとリーダーは大活躍です。

縦割り班活動での子ども同士の関わりから、「尊敬、思いやり、いたわり」といった豊かな心が育まれます。

次に「地域と学校パートナーシップ事業」の充実です。「学・社・民の融合」を目指す新潟市の教育ビジョンで、中心となる事業です。

西内野小は取り組み開始から四年目に入りました。今年度も「西つ子支援隊」の参加は、のべ二千七百名に達します。量だけでなく、支援の質も充実しました。水泳指導の補助は、単なる監視ではなく、入水しての指導補助です。



そして、支援隊のメインは、十月の「西つ子ふれ合い広場」です。文化祭での家庭・地域とのふれ合い活動です。学年PTAの他に、毎年十前後の体験型ワークショップを地域の方々が担ってくださいます。

将棋、昔の遊びと子どもたちには経験のない活動が用意され、大喜びで参加します。友達、地域の方々との豊かなふれ合いが、子どもたちの心を豊かにすることを実感しながら、今後も「共に歩んで」行きます。

(文責 小林 広紀)

平成24年度
会務報告

平成二十四年

4・26	平成23年度 会計監査(新潟会館)
5・12	本部会 【平成23年度会務報告】 【平成24年度活動の重点・各部の活動計画・予算案】 会計決算報告 (新潟教育会館)
6・2	学科代表者会・支部長会 (組織部主催) 専門部会(研修部・広報部・交流部)評議会 【平成23年度会務報告】 【平成24年度活動の重点・各部の活動計画・予算案】 会計決算報告 (新潟教育会館)
7・20	教育新報第163号発行
8・24	新潟大学首都圏同窓会 (東京)
8・25	正副会長専門部長・研修部打合せ (新潟教育会館)
9・29	【第39回同窓生の集い】開催 (新潟会館)

学校紹介
②

あいさつと歌声が

響く学校を目指して

三条市立栄中学校

当校は、昭和五十三年四月に旧栄村の福島中と大面中を統合して開校しました。今年度で創立三十五年目を迎えました。全校生徒は三百十九名、十一学級の学校です。

放射状の独特な校舎の周囲には、桜や花木など樹木が多く、色とりどりの花々が校舎を彩ります。高床式の体育館や三百メートルトラックと野球場の内野が交差しない広いグラウンドなど、体育施設に恵まれています。

明るく素直な生徒が多く、整備された教育環境の中で諸活動に意欲的に取り組んでいます。部活動は全員入部を原則とし、一生懸命に取り組む、高い成果を上げています。

本校の校風を一言で表すと、「あいさつと合唱の栄中」です。「あいさつ運動」は、毎年、生徒会重点活動の一番目に位置付けられ、継続的に行われています。生徒同士は元より、教職員や来校者へのさわやかなあいさつが自然に行われており、地域の皆さんからも高く評価されています。

「合唱」は、校内合唱コンクールや卒業式での卒業生記念合唱などどの



中学校でも行われていますが、当校では、毎年入学式で、二・三年生が新入生を歓迎する合唱を行うことが特色の一つとなっています（写真）。今年度の曲目は「Tomorrow」でした。新学期の始業式の翌日に行われる入学式で歓迎合唱

ができるにはある仕組みがあります。前年度の卒業式で、一・二年生が「Tomorrow」を合唱する中を卒業生が退場しているのです。また、この曲は三年前の入学式で先輩が歌ってくれた曲なのです。入学式で歓迎された曲で卒業式場から退場するのです。この歓迎曲（＝退場曲）は三曲でローテーションしています。

このような取組は私には初めての経験でしたので、昨年度の入学式で歓迎合唱を聞いたときは大きな感動を覚えました。それは、生徒達は一度、卒業式で体験しているとはいえ、始業日と

当日の二回の練習だけで素晴らしい歓迎合唱を発表したからです。

私はこの取組のルーツに興味をもち、調べてみました。十年ほど前の新入生歓迎会では、二年生、三年生がそれぞれ別々に歓迎合唱をしていたそうです。また、卒業式の退場では在校生が合唱で送っていたそうです。そこで、音楽の教職員等が提案して、これらを発展させて、平成十四年度の入学式から二・三年生が歓迎合唱を行うようにしたのでした。取組がスタートして十一年、誇れる教育活動として継続したいと考えています。

三条市が進めている小中一貫教育の一つの事業として、昨秋に、三年生が学級ごとに校区の三つの小学校を訪問し、全校児童との音楽交流を行いました（写真）。三年生が栄中学校歌と合唱コンクールで歌った合唱曲を発表し、小学生も歌などを発表して、価値ある交流活動の一つとなりました。

これからも、あいさつと歌声が響く学校を目指していきます。



（文責 遠藤 精一）

平成二十五年

10・11	附属新潟中学校秋の研究発表会
10・18	附属長岡3校研究発表会
10・19	附属特別支援学校研究発表会
10・27	【新潟大学・全学同窓会交流会】 （ANAクラウンプラザホテル新潟）
12・8	役員会 （新潟教育会館）
1・17	教育学部教員・職員との 懇談会（新潟会館）
1・25	附属新潟中学校冬の研究発表会
2・7	附属新潟小学校研究発表会
2・20	教育新報第164号発行
3・2	本部会 【平成24年度会務報告・ 各部活動反省・会計執行状況】 【平成25年度の活動方針・予算案】
3・25	新潟大学教育学部卒業式 同 卒業記念祝賀会



全学同窓会交流会の報告

広報部 佐藤 紀代子

十月二十七日(土) 十五時から、ANAクラウンプラザホテル新潟を会場に平成二十四年度新潟大学・全学同窓会交流会が開催されました。下條文武学長の開会の挨拶の後、新潟大学研究トピックスとして新潟大学・農学部・トラク助教(自然科学系・農学部)の中井博之様から「高機能性食品素材として有用な新規糖質の生産開発」という演題で講演をしていただきました。



近年、健康食品や医薬品素材として注目されている付加価値の高い機能性オリゴ糖を安価な天然糖質を原料とし、低コスト大量生産するための製造法の開発の技術が再生医療の分野でも期待されていることに、



同窓会からも期待の声が続々と上がりました。次の講演は、環境省佐渡自然

保護事務所首席自然保護官の長田啓氏から「トキの野生復帰が目指す人と自然の共生」という演題でした。三十六年ぶりのトキのふ化と今後の課題について、佐渡の美しい自然やトキの貴重な映像を交えながら、ご講演いただきました。トキの野生復帰に向け、二〇〇八年の第一回放鳥から二〇一五年までに六十羽のトキの定着を目指した結果、現在は野生下で誕生した八羽を含む七十五羽のトキが生存していること、しかしながら、

トキの放鳥の成功の鍵は、これからの生態系の保持であることを改めて考えさせられました。

全学同窓会懇親会では、全員で「新潟大学学生歌」を合唱し、大学の運動系、芸術系の部活動並びに図書館関係への資金援助贈呈を行いました。



学科の活動 《教育学科》

教育学科 同窓会活動

佐々木 研

教育学科学士会という名称で活動しています。昭和六十一年十月の発足で、「会員相互の協力により、現場教育の前進のために努力すると共に、教育学の研究を行う」ことを目的としています。そして、本会の目的達成のための会合、機関誌の発行、他団体との提携を行うことを会則に謳っています。

本会が発足する以前にも、非公式の勉強会形式の会合は行われていたようですが、教育学科卒業生をきちんと組織立てたものにする必要があるということで、本会が、会則のもと正式に活動することになったのです。

発足当初の機関誌(会報)の巻頭言には次のようなことが書かれており、卒業生に、本会に集うよう呼び掛けています。

○本会は、教育学科卒業生の同窓会組織であること。

○大部分の会員が義務教育学校で教育実践に務めているので、実践研究の情報が相互に伝達されるようにした

いこと。

○同窓会には親睦会の機能もあるので、堅苦しいことは抜きにして、談笑する機会も大切であること。

そのようにしてスタートした本会ですが、年一回の総会・懇親会の開催、会報の発行、名簿の作成などの活動を行ってきました。大学の教官からは、総会では、講話という形で大学の様子などを話していただいたり、また、会報には、研究室だよりのコーナーに寄稿していただいたりして、情報を共有してきました。

ところが、回を重ねるに連れて参加者数が減少し、二けたの人数が参加してくれば御の字といった状態で、この数年は、五・六名の参加で、しかも、前記の巻頭言の三つ目の親睦会目的の会になってしまっています。また、事務局の負担軽減の意味もあって、十年ほど前から、会報の発行も会費の徴収も止めています。

だからと言って、諸先輩方が立ち上げてくれた本会の灯を消すわけにはいきませんので、年一回の総会・懇親会だけは何とかして継続していかなければならないと考えています。

教育学科卒業生の皆さん、毎年、八月の第三か第四土曜日の夕方、新潟駅周辺のとある場所に集って、一杯、傾けませんか。

学部との懇談会

大学と教育現場が相互理解と
交流を深めた懇談・懇親会

交流部副部長 橋谷田 登

一月十七日（木）、新潟市の新潟会館において、新潟大学教育学部教員・職員と同窓会役員との懇談会・懇親会が行われました。毎年、同窓会の交流部が企画・運営する事業で、今年度も大勢の方々にご参加いただき、相互の交流を深める有意義な会となりました。

大学側からは、ご多用の中、五十嵐尤二学部長様をはじめ、十四名もの教員・職員の方々からご出席をいただき、同窓会からは佐藤重勝会長以下十六名が出席しました。

懇談会では、最初に佐藤会長から、同窓会六十周年事業として行われた同窓生の集い等の事業の報告と感謝の言葉がありました。その後、同窓会の各専門部（研修・広報・組織・交流・事務局）の事業概要について報告を行いました。

五十嵐学部長様からは、教育学部の現状や課題について具体的に説明していただきました。近年の大きな課題で

あった卒業直後の就職への就職率の低下については、昨年度、改善が見られ、他大学の教育学部との比較においても順位を上げることができ安堵している。これからも、目先にとらわれず、総合大学の教育学部として、量だけでなく、質の高い人材を育成していきたいとお話がありました。



佐藤重勝会長

後半の意見交換では、教育現場で求められている教員の資質について活発な意見交換が行われました。

まず、学生が在学中に取得する教員免許状について話題となりました。幼・小・中・高とたくさんの校種の免許状



五十嵐尤二学部長

を取得する学生がいるが、本当に学生のためになっているのか。現場の視点で考えると、特に中学校などでは複数教科の免許状を取得したほうが採用に有利ではないかとの意見が出されました。さらに、特別支援を必要とする児童生徒が増加している状況から、異なる校種の免許状を取得する場合は、特別支援学校の免許状を取得することも有効な選択であるとの意見も出されました。大学として、これまでも学生に対し指導してきたことではあるが、依然厳しい採用状況であることから、取得免許について、さらに情報提供など学生支援をしていくことが話し合われました。他に、教育実習や学習支援ボランティアなどの現場直結する場面において、真剣に取り組みむ学生の様子が紹介されました。

また、県外で就職する学生も多くなってきたことや、卒業して数年後に採用されることもあることから、同



滝澤かほる副学部長

窓会として県外支部の設立や卒業後の連絡体制の強化について取り組んでいきたいとの報告がありました。

宮川由美子同窓会副会長のあいさつで懇談会を閉会しました。

会場を移動しての懇親会は、滝澤かほる副学部長様の乾杯のご発声で開宴となりました。

懇談会で出された数々の課題解決への取組や大学と学校現場の双方向での情報交換など、教育に関する尽きない悩みや熱い思いを語り合いました。時間が足りないのがとても残念でした。鶴田一雄副学部長様からは、学部と同窓会のさらなる連携と発展への思いを込めての万歳をいただきました。

最後に、湯本正明同窓会副会長のあいさつがあり、教育力向上のための一層の連携を確認し、閉会となりました。

会員の皆様には、今後も学部と同窓会に絶大なるご支援をいただきますようお願い申し上げます。

大学のコーナー

「附属長岡校園の四年間」

教育学部副学部長 鶴田 一雄

私は、芸術環境創造課程書表現コース（通称書道科）に所属しており、専門は中国の書道理論、書道史です。昨年三月末まで附属長岡の幼稚園長を兼務していました。この二期四年間は私にとって貴重な経験となりました。

附属長岡の三校園（幼稚園、小学校、中学校）では、平成二十二年度から「幼小・中十二年一貫教育のカリキュラム開発研究」というテーマで、文部科学省の研究指定を受けて研究に取り組んできました。県内でも小中一貫や中高一貫教育の学校はありますが、幼小中十二年一貫というのは、全国的にも珍しいようです。附属長岡の三校園は、同一敷地内にあり、三校が廊下で連結し、普段から交流授業が行われており、割合自然な形でスタートすることが出来ました。平成二十一年秋から試行が始まりましたが、最初の合同研究会では、各々の指導案を持ち寄って検討会を行ないました。その時、用語の使い方や認識の違いが表面化しました。会の最後に当時の中学校副校長であった

小林先生が、「校種毎に各々文化が異なるので、ゆっくりやりましょう。」と言われたのが印象に残っています。爾来三年、研究は順調に進みました。初年度は研究主任の負担が大きく、会議が夜遅くになることもありましたが、二年目からは、全体会と主任会の開催曜日を分け、主任は金曜午後には授業を入れないようにしました。又、各校の校務分掌を統一したり、行事を調整するなど、環境整備も進みました。昨年十月十八日には、合同研究会を開催し、新設教科「社会創造科」で取り組んだ授業の成果や幼小中一貫教育に関するシンポジウムを開催し、県内外から九百数十名の参加者がありました。附属学校の使命としては、研究を主目的としますが、近年、文部科学省からは「地域のモデル校、国の拠点校になれ」とお題目のように言われます。附属長岡三校園では、まさにそれを実践しているので、充分役目を果たしていると思います。

附属長岡校園では、大学の教官に研

究会での指導助言を依頼する際、研究会前から定期的に事前検討会への参加を要請し、コミュニケーションを密にしています。大学では、教員養成の一年次学生を対象にした「入門教育実習」を実施し、新潟・長岡の両附属学校を中心として、学習活動や行事に学生が参加しています。また普段から、大学教官が自分の教育研究のために附属学校を活用したり、時には学生を引率して授業観察を行ったりしています。教育実習では、二年次の観察実習や三年次の本実習で、附属学校の先生方に懇切な指導をいただいています。学生は、実習を終えると態度や声の出し方まで違ってきます。本学部では、一年次から四年一貫の教育実習を標榜しています。その点でも附属学校の存在は不可欠です。今後の課題は、「大学と附属学校の連携強化」だと言われています。附属学校の先生には、教育実習の事前・事後指導や免許更新講習のゲストティチャーとして授業を担当してもらっています。

教員養成系の国立大学では、昨年の中央教育審議会の答申を受けて、教員の質の向上やいじめ問題をはじめ、現場の諸問題に対応することができる教員の養成が急務です。人間的にも魅力のある教員養成を目指していきたいと思っています。

事務局だより

去る五月二十一日にお亡くなりになった本間英輔さんの奥様から電話があり、創刊当時の貴重な教育新報をいただきに伺いました。

本間英輔さんは二代目会長をされた方ですが、当時中心になって教育新報の発行に携わった方です。

創立六十周年を迎えた今年度は、同窓会六十年の歴史をまとめようとしてみたのですが、資料としてあるのはこの教育新報と「炬火二号（昭和43年）」だけです。

二月の「教育新報一六四号」と一緒にダイジェスト版をお送りしようと思ったのですが、間に合いそうにもありません。七月にはお送りできると思います。（事務局長 櫛谷秋男）

編集後記

もうすぐ平成二十四年度が終ります。しつかり締めくくり、新たな気持ちで新年度を迎えたものです。

教育新報一六四号をお届けします。一年間、関係各位には、ご協力をいただきましてありがとうございます。これからも、会員の皆様の声を紙面に生かしたいと思っています。会員、支部、学科の情報やご意見等ありましたら、事務局までお寄せください。